

下川手集落と新潟大学

ダブルホーム活動交流10周年を祝う



交流10周年を祝って「祝乾杯」

新潟大学に18あるダブルホームの一つ「ほりこたつ」が松之山下川手集落で活動を始めて10年の節目を祝う祝賀会が10月20日(日)、同集落会所で開かれた。

現大学生17人とO・B・G 10人、教職員7人が訪れ、集落で活動した10年を振り返り、次の10年へつなぐ夢を語り合った。

ダブルホームは、正解のない地域課題に学生・教員・職員によるチームで取り組むプログラム。「ほりこたつ」では、同集落の中ほどにある田んぼで無農薬の米を語り合つた。

ダブルホームは、正解のない地域課題に学生・教員・職員によるチームで取り組むプログラム。「ほりこたつ」では、同集落の中ほどにある田んぼで無農薬の米を語り合つた。

話してほしい」とあります。集落総代さんは「集落は24世帯に減少し、高齢化、一人暮らしも多く、皆さんが参加してくれるところで活気付けられています。今後も

他、集落の道普請や行事、祭りにも集落の人たちと一緒に活動している。

10年前、下川手との出会いを作った紙谷智彦名譽教授は「一緒に活動することによって学生の成長に繋がり、地域にどうとも活動の維持や、文化の継続発展など、若い人たちからの刺激は大きいと思う。頻繁に通い、いろんな活動を行つてきて10年。ここで活動したこと自分が自分自身にとってどんな効果があつたかぜひ話してほしい」とあります。

また、同集落の小林茜里さん(中2)は、「ほりこたつ」の田んぼで出会った絶滅危惧種トノサマガエルの研究について発表。過去2年の研究に加えて、新たな仮説を検証した。最後に「自然と人との持続可能な関係を築くにはどうしたらいいのか自分なりに考えを深めることができた。人と自然の共生について考え方行動に移せる人になりたい」と発表すると、大きな拍手が送られた。

引き続きお願いしたい」と呼びかけると、「ほりこたつ」ホーム長の丸山栄里さん(教育学部3年)は「先輩から引き継がれていますことを後輩に伝え、今後も15年、20年と続け、地域に活気を与える存在であり続けたい」と応えた。

2017年に卒業した塩美咲さんは「教職員だけではなく、年齢幅広いいろんな人との繋がりを実感できる活動だった。それが今の仕事に繋がっている」と振り返った。

また、同集落の小林茜里さん(中2)は、「ほりこたつ」の田んぼで出会った絶滅危惧種トノサマガエルの研究について発表。過去2年の研究に加えて、新たな仮説を検証した。最後に「自然と人との持続可能な関係を築くにはどうしたらいいのか自分なりに考えを深めることができた。人と自然の共生について考え方行動に移せる人になりたい」と発表すると、大きな拍手が送られた。